

巻頭言

頼られる研究所とは

TSUDA Tomoyuki

企画管理部長 津田 知幸



本

年4月にこの職を拝命して以来、毎日あわただしい生活を送りながらその責任の重大さを痛感しているところです。動物衛生研究所の研究を改めて眺めてみると、対象範囲と研究分野の広さに改めて驚きます。農研機構の一研究所とはいえ、家畜衛生に限っては唯一の専門研究機関であり、基礎から応用までの幅広い研究が必要であることは言うまでもありませんが、国のあり方や独立行政法人の見直しに関する議論も盛んになっている現在では、研究課題、人員、資金の選択と集中を前提とした効率化も求められています。

動物衛生研究所はこれまで多くの研究成果を生み出し、これを病性鑑定、講習・研修、生物学的製剤配布といった様々な形で社会に貢献してきました。動物衛生研究所の活動が広く認知されるのは成果がこうした形で世に出たときがほとんどで、日頃の活動は学術分野で目にとまる時に限られ、一般の注目を浴びることが少ないのも事実です。

4月20日に宮崎県で確認された口蹄疫は発生数292件29万頭に及ぶ未曾有の被害をもたらしましたが、宮崎県や全国から派遣された方々の血のにじむような努力のかいもあり7月27日をもって終息を迎えることになりました。5月には農研機構に対して独立行政法人発足以来初めてとなる機構法第18条に基づく緊急時の農林水産大臣要請も発出され、農研機構を挙げての対応となりました。口蹄疫発生以来、動物衛生研究所は昼夜を分かたぬ緊急病性鑑定を行っておりましたが、要請を受けて担当研究チームや専門研究分野の研究員による病性鑑定や清浄性確認等の業務に加え、他の研究チームや一般職員ま

で現場での防疫作業や清浄性確認検査、緊急調査等に参加するなど、まさに所を挙げての対応を行ったことは各方面から高く評価されています。動物衛生研究所はこれまでも牛海綿状脳症（BSE）や高病原性鳥インフルエンザなどの発生に際しても緊急病性鑑定や検査を行ってきましたが、そうした活動が世に知られるのは社会的に重大な事件の時に限られます。

しかし、非常時に注目を浴びることができるのも平時から地道な研究を継続していたことの表れであり、これが頼られる研究所であり続けられる所以と確信しています。また、今回の口蹄疫で見せたような全員が一丸となって取り組む姿勢は昔から動物衛生研究所に脈々と受け継がれてきた伝統だと思えます。研究課題の選定や研究資金獲得では重大な伝染病に傾斜しがちですが、農場に常在する慢性感染症や生産病などの研究、飼料や畜産物を汚染する有害微生物や有害物質などのリスク管理技術の開発も動物衛生研究所として取り組まなければならない課題だと考えています。また、今回の口蹄疫事例では人獣共通感染症ではない「人には無害」な動物の病気であっても、社会的・経済的に計り知れない被害を及ぼすことが改めて確認されました。今後とも「流行病」のみにとらわれず動物衛生を巡る内外の情勢変化に機敏に対応しながら、必要な研究は継続しなければなりません。動物衛生研究所の理念である「動物を衛（まも）る、人を衛（まも）る」を目標として、これからも地道に頑張っていきたいと思います。